

マルグリット・ドルレアンの時禱書 (BnF.ms.lat.1156B) における 余白装飾の両義性

田辺 めぐみ

14世紀後半以来、フランスを中心に世俗信者の個人用祈禱書として急速に普及した時禱書は、顧客の注文に柔軟に対応した彩色法で知られる。肖像画、紋章といった、写本注文主、或いはその所有者特定に有用なモチーフに加え、キリスト教教義に縛られること無い特殊な図像体系に、顧客の要望と画家の意向との巧妙な交差を推察し得ることが多いのである。果たしてこのような世俗的要素は、本体の宗教性と乖離するものだったのであるか？

1420年代にフランスで制作された、マルグリット・ドルレアンの時禱書 (BnF.ms.lat.1156B) は、標準テキストに対応する定型の宗教主題挿絵で構成されている。例外は、精霊の時禱の各課冒頭に認められる挿絵レパートリーの豊富さにのみ指摘出来る。一方、余白装飾部分を占める多種多様な題材については、その意義及び特異性に着目する必要がある。まず、ミニアチュールの補足説明ともなる副次主題の存在は、各写本ページ装飾全体の有機的結合を示唆する。聖人像の余白部分に挿入された、聖人伝や象徴物は、その顕著な例として挙げられる。また、聖地巡礼、狩猟、百年戦争戦闘場面といった様々なテーマは、写本当初所有者である、マルグリットを想起させるとともに、画家の写実表現への関心の高さを窺わせる。

このような見地において、当該写本余白部分に頻出する農作業風景が、写実表現の一環として見なされることは免れ得ない。しかしながら、黄道12宮と併に各月の彩飾題材にとられている農作業風景が季節に忠実に対応しているのに反し、本文挿絵ページの余白部分を装飾する同題材は、季節的一貫性を見せない上、その世俗性は祈禱文との一抹の整合性をも喚起しないのである。果たしてこのような世俗主題は、単に画家の図像レパートリーの豊富さを顕示するだけのものではあったのだろうか？

このような問題に対峙するにあたって考慮すべきであるのは、各モチーフの象徴性である。それぞれの多義性を把握した上で、各写本ページの構成要素を包括的に解釈することにより、一見、無意味な装飾、或いは当時の生活情景の写実描写に過ぎないと見なされていた数々の余白装飾が、宗教主題ミニアチュールとの直接的、或いは間接的な関連性を有していることが明らかとなるのである。

従来、時禱書の余白部分に認められる様々な世俗主題は、その着想源の探求、あるいは時代背景考察に終始することが多かった。本発表では、フランス中世末期における芸術の大衆化、及びキリスト教教義の世俗的解釈の発展に伴い、写本画家がキリスト教図像の伝統から逸脱し、独自の教義表現法を形成する傾向があったことを考慮にいたした上で、15世紀フランス写本の傑作のひとつとして名高いマルグリット・ドルレアンの時禱書における様々な世俗題材の両義性を提示したい。